

# 図書館だより

Library News No.63

Nara National College of Technology

2006年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



ギリア・カピタータ。

花は、爽やかに、青い。

種は、秋に蒔く。花は、初夏に開く。

わたしの恋も、春がすぎるところ、開くのだろうか。

この青い花には、「爽やかな恋人」という花言葉がお似合いだ。

絵 2E 柳 さなえ さん

文 しみずたかお

## 目 次

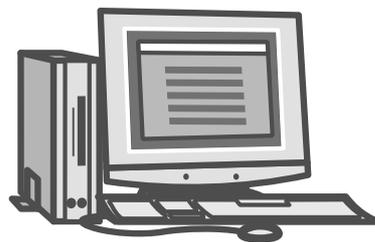
巻頭言「現実を直視しよう！」 .....	2
読書感想文コンクールを終えて .....	3
入賞作品紹介 .....	5
学生会図書委員によるブックガイド .....	15

2005年は、アインシュタインが、現代物理学の基礎となった、光電効果の理論、ブラウン運動の理論、そして特殊相対性理論を発表した“奇跡の年”、1905年から100年にあたり、「世界物理年」と言われました。この100年間科学技術は驚異的な発展を遂げ、私達に高度情報化社会といわれる豊かな生活をもたらし、また私達はそれを享受しています。

しかし一方で、これら科学技術の発展がもたらした負の側面も顕在化しています。最も大きな負の側面は、「地球環境問題」でしょう。これは、地球温暖化とそれに伴う異常気象、エネルギー資源の枯渇、大気や水の汚染、大量の廃棄物、等々です。また、科学技術が肥大化したシステムを生み出し、そのシステムの信頼性の脆弱さ、例えば、コンピュータ・ネットワーク、大電力系統、鉄道網などが小さな人為的あるいは自然的要因で大きなシステム障害を引き起こす例は良く報道されるどころです。

このような科学技術のもたらす負の側面を極力抑制し、人類が持続的に発展していくよう、われわれ技術者、そして将来、工学技術に携わるであろう若い学生諸君に課せられた課題と期待は大きい。そのため、諸君には“現実を直視”して欲しい。私達の住んでいるこの地球、日本はどのような状況に置かれているのか、またこの技術の本質は何か、このシステム・モノは何か、など様々な側面から現実を見て欲しいと思います。そこから、この現実をいい方向に持っていくにはどうすればよいか、考え行動して欲しいと思います。

私が電機メーカーの研究所に在籍しているとき、「研究所の人間はモノを作っている“現場”を見ないといけない」とよく言われました。モノを作っている現場の状況（現実）を見ることによって問題点が明らかになり、新しい発想が見えてきます。現場は新しい製品・モノを生み出す源です。ただ、その現場・現実を単に「見る」だけではだめで、これまでに自分が得た知識を総動員し問題点を把握する必要があります。そのために、知識を貪欲に取り入れて下さい。単に自分の狭い専門分野の知識のみならず、電気工学ですと、電気の基礎理論から材料、機器・デバイス、情報にわたる広範な分野、それに、機械工学や物理、あるいは、化学、数学などの知識を充分身につけておく必要があります。若いときに得た知識、あるいは知識を修得しようという習慣は、今後の科学技術の発展を担い、科学技術を社会へ適用していく上で大変重要だと思います。工学は、理学と違い、豊かな社会生活の構築に貢献することが使命です。



平成17年度

## 読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

毎年行われている本校の読書感想文コンクールは、今回で第30回を迎えました。応募作品は、360編ありました。その中から、情報メディア教育センター運営委員会と国語科の先生方が慎重に選考し、次のように、11名の諸君の入選作を決定しました。結果は、全校放送でもお知らせしましたが、あらためてここに彼らの氏名を紹介し、その栄誉をたたえたいと思います。

### 最優秀賞

物質化学工学科 2年 隅野 慶子 『黒い雨』を読んで

### 優秀賞

電気工学科 1年 脇田 宗典 『十二番目の天使』を読んで

情報工学科 1年 岩井 晃人 『哲学の冒険』を読んで

情報工学科 1年 西山 裕一 『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』を読んで

電子制御工学科 1年 石戸 陽平 『これから技術者になる君へ 心得120』を読んで

物質化学工学科 1年 布村 優太 『イチローに学ぶ「天才」と言われる人間の共通点』を読んで

電子制御工学科 2年 福谷 健太 『もしも月がなかったら』

電子制御工学科 2年 吉野 仁 「戦後六十年について」

物質化学工学科 2年 前田久美子 『沈黙の春』を読んで

情報工学科 3年 河合 誠 「己のごとく汝の隣を愛すべし」

入選とはならなかったものの、選考の過程で優れた評価を得て最終選考に残った諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

### 佳作

1 M 大北 明彦 1 M 橋本 勝斗 1 M 和田 昇悟 1 E 米田 昇平

1 E 村井 雄太 1 S 中島 往馬 1 S 高木 一馬 1 I 岡田亜沙美

1 C 中田 薫徳 1 C 一瀬 由貴 2 M 辻本 裕佑 2 M 松好 宏太

2 M 安田 雄太 2 E 桂田 信祐 2 E 松本 吉修 2 S 染井 貴之

2 I 東 良美 2 I 荻野 雅泰 2 I 奥平 哲矢 2 C 奥村 彬子

以下、個々の入選作について少しコメントしておきます。

『黒い雨』を対象にした2 C隅野さんの文章は、彼女がその夏実際に訪ねた広島のごく普通の街に見えるのどかな風景と60年前の悲劇とを対比させた導入部分から始まります。タクシー・ドライバーの言葉を入れて、人々の記憶の風化が進んでいることをさりげなく匂わせるなど、なかなか上手です。反戦を声高に叫んだりしないこの小説のスタイルや枠組みの紹介も的確ですし、直接的には表されていない戦争の犠牲者

に対する書き手の気持ちについても、きちんと読み取っています。しかしなんとといっても彼女の文章が素晴らしいのは、小説の主人公の経験に自分の心情を重ねながら、この悲劇を自分自身の問題としてとらえようとしているところでしょう。今も終わることなく続いている戦争や戦乱は、決して遠い世界の出来事ではない。「平和で豊か」に見える私たちの生活の「近くに」「じわじわと忍び寄っている」恐ろしい現実ではないか。そう真摯に問いかけたうえで、隅野さんは、自分の学びをどう平和利用に結びつけるべきかと、自分に課題を与えるのです。この文章が、僕たちを勇気づけてくれたように、彼女自身をも勇気づけ、彼女の未来の糧となることを期待したいと思います。

自分に引きつけてという点では、2C前田さんの文章はずっと自分の専攻に近いところで書かれています。レイチェル・カーソンの有名な本を取りあげていますが、彼女の場合、それが中学生のときには読み切れずに途中で挫折した本であり、今回はその再挑戦をしっかりとやり遂げたという喜びが素直に出ています。このストレートさがいい。化学が好き、という強い思いと実際に積み上げられた化学の知識が、たんにこの本を読み通す力を彼女に与えただけでなく、化学が抱える危険性に対するカーソンの批判や警告を踏まえて、それらを乗り越えていこうとする前向きな気持ちもまた育んだようです。

戦争と平和を見直そうとした2S吉野くんは、太平洋戦争を描いた山岡荘八の作品から、少数意見を担保しておくことの重要性、過去の事実から学ぶことの困難さを読み取り、戦争に関わった人々は被害者意識の強さに比べて加害者意識が希薄であることなどを学んでいます。

また、宇宙でいちばん近くにある星である月が地球に与えている影響を知った2S福谷くんは、改めて「現在僕がここにこうして存在している」ことの「奇跡」を実感するのです。また、3Iの河合くんは、さすがに高学年らしく、愛や自己犠牲という難しいテーマについて、しかし気負うことなく、将来自分が就きたいと思っている職業に即して、自分の考えを進めています。

1C布村くんは、イチローを紹介する本から得た野球以外の分野にも通用するプロフェッショナルになるためのヒントを、1S石戸くんは、技術者の心得を書いた本から自分の「ためになる」ことを、1I西山くんは、国際協力という点で、医師でも看護師でもなく外国にも行けない人間がそれでもできる5つのことを、それぞれ箇条書きにうまくまとめています。道を知るだけでなく、その道を歩くことの大切さを説く映画『マトリックス』の台詞を引用している1Iの岩井くんは、哲学が「知る」ではなく「する」に関わる学問だということを学んだようです。1E脇田くんは、物語に楽しく身をゆだねながら、そこから「より良い人生」への意欲と極意とを得ることを忘れていません。

さて、今回の入選作11編のうち、文学関連のものが4編、技術関連のものや自然科学の知識をもとに地球環境について述べたものが4編。高専生による読書感想文として、その「らしさ」を生かした配分になったかと思います。また、戦後60年ということもあってか、戦争関連のものが3編入りました。

もちろん、本校の読書感想文コンクールは、ここに挙げきれない多くの優れた感想文によって支えられています。次回もまた、今年度以上の力作が寄せられることを期待します。

(国語科・武田)



## 入賞作品紹介

『黒い雨』

井伏鱒二 著

『黒い雨』を読んで

2C 隅野 慶子

私が初めて広島を訪れた今年、八月十二日も晴天で、空は雲一つ無く、青く突き抜ける様に眩しい日だった。原爆投下より六十年。戦後六十年。今日の広島には、戦争の影は全く感じられず、背の高い立派なビルが立ち並び、駅前や川岸では、私と同じくらいの歳の子が、ギターを片手に歌を唄い、ビジネスマンや買い物客が忙しく行き来する、普通の街に思えた。原爆投下の直後、大勢の人が火に追われ、水を求めて息絶えていった元安川は、美しく整備され、遊覧船が行き交っている。「年々、原爆ドームが小さくなるような気がする。」と言った、タクシードライバーの言葉が耳に残っている。

私の読んだ「黒い雨」の舞台は、今から六十年前の広島の前。主人公重松、その妻シゲ子、そして姪で娘同然の矢須子の身に降りかかった、悲劇の物語である。六十年前の大きな出来事なのであるが、拍子抜けするほど淡々と書かれている。この日記の清書は、原爆病の噂で縁談が壊れてしまう、矢須子の健康の証明の為に始められた物で、その中には、戦争を正面切って批判したり、反戦を叫ぶ所は全く無い。しかし、平凡で善良な市民の目から冷静に書かれたもので、この日記の中で、戦時下で生きていくと言う事は、全てが戦争中心となり、黙々と戦争に協力せざるを得ない人々の悲しみや、犠牲になった人々への、無言の<sup>いたわ</sup>りを感じた。この朝広島で生きていた人々は、主人公と同様に、今日も昨日と同じ日々が繰り返されると信じていたに違いない。戦争中とは言っても、小さな喜びや家族との生活が、明日も続くと思っていたらう。それが、一つの原子爆弾によって全てが失われ、一瞬にして地獄の底に突き落とされる。子供を抱いたまま黒焦げになって死んでいる女性。潰れた建物の中で、生きながらにして焼

け死んでいく人々。普段ではまともに見ることの出来ない様子が、戦争という異常な世界で冷静に描かれている。重松自身も被爆し、矢須子も直後に降った黒い雨で二次被爆する。一瞬にして焦土と化した広島の現実。十四万もの人が犠牲になった事実。六十年経っても、後遺症で苦しむ人々。矢須子と同世代の女性として感じるのは、持って行き様の無い彼女の苦しみ、悲しみ、そして死と向き合う恐怖。本当に無念であったらう。アメリカの主張する、戦争早期解決の為の原爆の使用、保持には、何の正義も解決も無いことを痛感した。今、世界で起きている戦争や戦乱は、決して他人事ではなく、この過去に起きた恐ろしい現実が又再び、私達の近くに音も無く、静かにじわじわと忍び寄っている気がする。十四万人の犠牲者の苦しみ、それにまつわる何倍もの悲しみ、そして今も続く戦争や戦乱の犠牲者の悲劇の上に、今日の私達の平和で豊かな生活があるとするのなら――。

私は複雑な気持ちになった。安全で生温かい日常に、平和ボケしていないだろうか。かつて広島県産業奨励館として、その建物を見上げていた人達に、現代になって「原爆ドーム」という名前で保存されていることを、どうして想像出来たらう。六十年という、そう遠くは無い過去。それでもその中に、今の生活からは計り得ない、しかし、消えも拭えもしない原爆投下、それに繋がる戦争と言う歴史が確かにあったことを、私達は忘れてはならない。

私は今何をすべきなのか、何が出来るのか。化学を学ぶ一人として、それを平和的に利用する為にはどうすれば良いのか。様々な思いが巡ってくる。

“安らかに眠って下さい 過ちは 繰り返しませんから”

という、慰霊碑に刻まれた言葉が胸に堪えた。

『十二番目の天使』  
オグ・マンディーノ 著

## 『十二番目の天使』を読んで

1E 脇田 宗典

『絶対、絶対、あきらめない!』と言う言葉がこの本の中で一番印象的な言葉だったと思う。これは、ティモシー・ノーブルと言う少年がよく口にしていた言葉だった。この少年は、少年野球に入っているのだが、決して野球が上手というわけではなかった。フライボールを取るができない、バットに球を当てることすらできない、空振りばかりするというのにティモシーは『絶対、絶対、あきらめない!』という言葉をつぶやきながら、いつも頑張っていた。目をキラキラさせながら。

僕は、この本を読んでいくうちにだんだん吸い込まれていくような感じがした。ティモシーの姿を見ていくうちに、『頑張れ』と声をかけたくなるようになってきた。下手ながらも、一生懸命頑張っている姿がとてもよかったように思える。

この少年野球の監督を務めているジョン・ハーディングという人も、ティモシーに興味を持っていた。この男性は、突然の事故で愛する妻と息子を失ってしまったのだ。しかし、ティモシーのおかげで立ち直ることができたのだ。ジョンはティモシーの姿を見て『自分も頑張らなくては』と思ったのだろうと僕は思う。

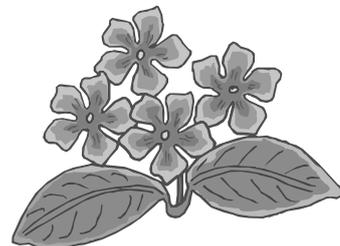
でも、なぜティモシーは野球をやめなかったのが不思議に思えた。もしも、自分がティモシーならやめているにちがいない。恥ずかしい思いをしたくないから、きっと僕だったらやめていると思う。ティモシー本人も恥ずかしい思いをしたくないと思う。したいとは決して思っていないだろう。何回も空振りしたりして恥じることに慣れてしまったのだろうかとも思った。こんなに我慢強い人は、今までに見たことがなかった。ジョンの励ましがあつたから頑張つて来られたのかもしれないとおもった。

ジョンも、ティモシーに負けないうらい強い人間だと思った。なぜなら、愛する妻と息子を事故で失った悲しみに負けず元気に振舞っているからだ。もしも僕がジョンだったら、たぶん、いや絶

対に立ち直ることができないだろう。もしもジョンがティモシーと出会っていなかったらどうなっていたらだろうか。きっと人生に疲れ果ててしまって、何事にも投げやりになってしまっていると僕は考える。

ティモシーはジョンと、ジョンはティモシーと出会えて本当によかったと思っているだろう。ティモシーとジョンに直接会って、聞いてみたかった。ティモシーが初めてヒットを打った時は、正直嬉しくなった。この時、ティモシーも嬉しかっただろう。人間は頑張つたら何でもできるということを改めて教えられたような気がする。

この本の著者オグ・マンディーノは、『人生とはこう生きるべきだ。』といった類のことをクドクド述べていることは決してしていないと思う。物語の中にすーっと読者を引き込み、より良い人生を生きようとする意欲と、そのための極意を、それとなく読者の心に植え付けてしまう。これがオグ・マンディーノの作品の最大の特徴だと思った。オグ・マンディーノが巧みに語るこの物語は、自然に気に掛けたくなるキャラクターたちで満ちている。この感動的な作品を通じて、僕は彼に、人生とは自分に与えられているものがどんなものであれ、それを用いて精一杯生きるためのものである、ということを知られたと思った。この本は自分にとって、とても魅力的な一冊だったと思う。



『哲学の冒険』

マーク・ローランズ 著

## 『哲学の冒険』を読んで

### 1 I 岩井 晃人

哲学書を読むのは苦手です。堅苦しさがあり、一般人が読むものではないと言わんばかりの面構えがあったからです。今回この本を読んだのは、映画を題材に哲学の理論を解き明かすという、親しみやすい本に見えたからです。

この本が取り上げている映画は、SF映画ですが、なぜSF映画を題材にするのか？と思いました。本には「異質の、別の、他者との遭遇」とありました。なるほど、「他者との遭遇」とは自分の姿をくっきり映し出す、いわば鏡のようなもの。他者を通す事により自分の姿がよりいっそうはっきり見えるのだろう、それで題材がSF映画なのだろうと思いました。

本を読み進めていくと、哲学とは「知る」ことではなく「する」ことに関する学問であるとありました。これはどういう意味なのでしょう。「する」学問と言われて訳が分からなくなったので、「知る」学問について考えてみました。「知る」ことは、知識や法則を身につけること、つまり哲学は哲学書にある難しい知識を身につけるものではないということらしいです。この本に取り上げられている映画の一つに「マトリックス」があります。実際に鑑賞してみたのですが、登場人物の一人がこのようなことを言っていました。「ただ道を知るだけでは十分ではない。我々はその道を歩くことができなければならないのだ。」この言葉の「歩く」こそが「する」ことではないか？そう思いました。

この本を読み終えた後、様々なSF映画をみました。今まで「ターミネーター」など「ド派手なアクション映画とみていたものが」そう見えなくなってきました。何とというか、思索的というか、何でもないセリフも意味深に聞こえたりします。まあ、見事に著者に思惑にはまってしまったわけです。

優れた映画というのはSFだろうと、ドラマだろうと立派な哲学書なんだなと思います。今回読んだ本はたまたまSF映画を題材に書かれていた

のですが、SF映画はサイエンスフィクション、フィクションとはいえ基盤は地球の文明批評です。現実の一部を想像豊かに拡大し、その一部の傾向がこのまま進行すると未来はこうなる！と思索しているものである以上、どんなSF映画も思索的であるといえます。SFのSはスペキュレーティブ（思索的）かもしれません。

哲学とは何か？という事を考える、という事を考える、という事を…という無限ループがこの文を考えている最中幾度もおこりました。哲学とは何か？をわかったような事を少し書きましたが、何もわかっていません。わかった事といえば、「道を知ったが、まだ歩いていない」ということでしょうか。

『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』

山本敏晴 著

## 『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』 を読んで

### 1 I 西山 裕一

アフガニスタンでは大勢の難民が苦しんでいる。そのため、著者は二〇〇二年十月十八日に国際医療協力のため日本医療救援機構（MERU）の医者として、アフガニスタン北部の町、マザリシャリフに向けて派遣された。国際協力を現場で実践する人達を私は尊敬している。私にも出来る事を探して募金をしたりしているが、もっと他に出来る事はないのだろうか。著者は私のような考えの人によくこういう質問をされる。「私はあなたのように医者でも看護師でもないし、家族がいるから外国へも行けない。それでも私にできることは何かありますか？」この質問に対して、著者はいつも、「皆さんには、以下の五つのことができます。」と答えている。

一つ目は、とりあえず海外へ行ってみる。ともかく自分の目で見てみる。初心者、観光旅行でいいので、東南アジアあたりに行ってみるといいらしい。逆に、いきなりアフガニスタンやイラクに行つてはいけぬ。そうして、東南アジアの国々の子供たちを見てくるといい。すると、義務教育を受けられるのは、世界の恵まれた

国々に生まれた子供たちの特権だったと気づくだろう。自分のみでいた世界が、世界のほんの一部だったことを気づけるかもしれない。世界の実態を知ることができるだろう。

二つ目は、国際協力の世界には、それ専門の勉強が必要だということ。あと英会話とパソコン。大学でいろいろ勉強してから現場に行っても「現場に行ったら、私のやりたいこととどうも違った」という話をよく聞くため、勉強をする前に、まずは現場をある程度経験した方がいい。現場を経験したあと、再び大学や大学院に戻り、自分の能力を生かせる学問を勉強するといいらしい。今の私には少し無理だが、将来は実行してみようと考えています。

三つ目は、募金をするなら、継続、ニュースのチェック、そして団体の予算収入を確認すること。募金をするならば、できれば長い間、ずーっと続けることが重要だ。建物だけ建てて喜んでいだけでは全然意味がない。建てた以上は、その活動の年間の経費が維持できるように最低でも十年以上は援助を続けること。また、自分がお金だして、その国のその分野がよくなっているかどうか毎日チェックした方が良いらしい。これなら、今の私でもすぐに実行できるので、近いうちやりたいと思っています。

四つ目は、実はなにをやっても、国際協力だけでなく、身近なところで環境問題。人類全体の問題、地球全体の問題に関わっていかうという姿勢さえあれば、なにをやってもそれは国際協力だと思われる。よって、日本にいてもできることはたくさんある。一番手っ取り早いのが環境問題であり、「ゴミ」である。ゴミを分別して捨てるのを徹底的に行うことだ。分別すればすべて立派な資源。小さな事からコツコツとそれは、大きな事につながっていく。

五つ目は、世界に目を向けた子供たちを育てること。みんなにできる国際協力の中で、もっとも重要なのが、これらしい。自分の子どもたちの未来が心配なら「今から」世界に目を向けた子どもたちを育てなくてはいけない。まずは、世界中で起こっている色々なニュースを毎日三分ぐらい説明してあげること。あと、小・中学生のうちから

発展途上国だったらどこでもいいので、観光旅行でいいからとにかく現地の実情を見せること。するとそれらに心を動かされる子どもたちも多いはず。興味を持たせる事から始めること。

以上のひとつでもいいから実行してみることにする。世界中の人々が実行したら、助けられる人も増えていくだろう。

『これから技術者になる君へ 心得120』

西畑三樹男 著

『これから技術者になる君へ 心得120』  
を読んで

1 S 石戸 陽平

僕は、「西畑三樹男」著の「これから技術者になる君へ 心得120」という本を読みました。この本を読もうと思ったきっかけは、図書館でしらべものの本を探していたら、なぜかこの本が目にとまり、読みたくなり借りたのがきっかけでした。この本の内容は、題名のままで、これから技術者になろうと思っている人に対しての心得が120個書いてあります。その中にあるほとんどが自分のためになるものばかりで非常にためになりました。そしてその中でも特にためになったものを書きます。

一つ目は、技術者になる以前に社会人としてしっかりしなければいけないということです。例えば、礼儀正しいあいさつ、正確な日本語による会話、どのような人とでも協調できる姿勢、真心、真面目、明るさ、ときには、精神的な犠牲が必要であるなどの基本的なことです。しかし、今の自分にはこれがあまりできていないように思えます。なので、高専を卒業するまでにはこれらのことがきちんとできているようになろうと思います。そしてこれに加えて技術者に必要なものは、元気な体で、何にでも興味をもち、工夫し、創造するといった探求心、独創心にあふれた気質です。さらに、技術をよく知りそれを身につけ、進展させるには次の姿勢が大切です。「流に入り、流より出でて、己が道」つまり、早くから良き指導者を求めて、その教えに学び、それに自分なりの考えを加えて新しい道を開いてこそ真のプロフェッ

ショナルな技術者になることができるということです。僕は、この言葉を知ることができて本当によかったと思いました。このことばをこれから、機会があれば思いだし、生かしていきたいです。

二つ目は、「技術者は目、耳、手、舌、の感覚を使うもの」というものです。どういうことかという、体全体を使って覚えた技術は、いつまでも忘れないということです。それは、まず目でよく見る。そして手に触れて、音を聞き、ときには味わってみるなどということです。これをずっとやっていたら、バスや電車の中のパイプがどうなのか鉄か握って判断したり、運転している機械を音だけで診断できるようになったりするそうです。僕もこれから、新しいものなどをみたら、体全体で覚えようと思います。

三つ目は、「高校までの学科を完全にマスターする」です。これは、技術系の職種へ就くのに一般教養は不必要に思え、おざなりになりやすい。しかし、多くの場合、学校を卒業し、実際に技術者になってみると、これらの科目を身につけていなかったことを痛烈に後悔するそうです。だから、学べるうちに、身につけておくべきだそうです。僕も今少し一般教科を手の抜いているような感じなのでこれからは、気をひきしめ、がんばっていききたいです。

四つ目は、「毎日の積み重ねが人間を成長させる」です。一人前の技術者になることは、遠い、高い山を目指して歩いていくようなものです。人間は、健全な体で多くの知識を吸収するほどに成長し、それに伴い自信も増します。そしてそれによって世の中に対する見方も変わってきます。すると毎日も楽しくなっていきます。だから僕は、これからの一日一日を大事に過ごしていきたいです。

このほかにもたくさんあったけれど、特に気に入った心得はこれらです。これからは、この心得を頭の中に入れておいて、自分の生活に生かしていきたいです。

『イチローに学ぶ「天才」と言われる人間の共通点』  
兎玉光雄 著

## 『イチローに学ぶ「天才」と言われる人間の共通点』を読んで

1C 布村 優太

この本は、「天才」と言われるイチロー選手のこれまでの人生に隠されている「人生を成功させるヒント」を色々紹介しようという本です。

僕がこの本を読もうと思った理由は、二つあります。一つ目は、僕が野球をしているからです。イチロー選手は、いつもどんなことを考えて練習したり、どんな気持ちで試合に臨んでいるのかわかり、少しでもイチロー選手に近づけばいいなと思ったからです。二つ目は、これからの世の中、イチロー選手のように一つのことに於いてのプロフェッショナルにならないといけないなあと思い、イチロー選手がどのような道を歩んで、プロフェッショナルとなったのかを知って、これからの僕の人生に役立てようと思ったからです。

僕は、これからこの本を読んで共感した部分を挙げてみたいと思います。

まず一つ目のところは、「普段着の気持ちで淡々と仕事をこなす。そして、心を澄ませて最高の集中レベルに自分を持っていく。そんな心構えが、私たちに最高の仕事をプレゼントしてくれる。」というところです。僕は、この部分を読んで淡々と冷静に何でもすることが大切なんだなあと思いました。実際、勉強においてもあせったり、イライラしながらやっても効率は全く上がらないし間違いもすごく多くなります。野球においても冷静かつ集中しないとエラーをしたり、サインを見落とすなどの凡ミスをしてしまいます。

二つ目のところは、「成功から得た自信は実はもろい。困難を切り抜けたときの自信こそ本物だ。」というところです。野球でも勉強でも全くその通りだと思います。一回成功して自信がついても、その次失敗して自信をなくしてかなり落ち込んでしまうときがよくあります。やっぱり自信を付けるためには、それ相応の苦しみと努力が必要なんだなあと思いました。

三つ目のところは、「調子のよいときもあるだろう。そこで浮かれてはいけない。あるいは、な

かなか結果が出せないこともあるだろう。だから  
とって落胆していても仕方がない。」というところ  
です。本当にその通りだと思いました。野球  
のバッティングでよくあることなのですが、ヒッ  
トをたくさん打っているときに凶に乗って長打を  
ねらったりして少しでもバッティングが狂うと瞬  
時にして打てなくなってしまいます。反対に打て  
ないときに「なんでだろう。」と悩み始めるとか  
なり長期間打てない日々が続きます。そのことな  
どから、調子の善し悪しで自分のペースを乱さな  
いことが大切だと思いました。四つ目は、「本当  
のプレッシャー克服法は、最高の自分を発揮する  
ことだけ集中するということ。」というところ  
です。この部分は、僕が一番、素晴らしい、その通  
りだと思ったところです。

勉強でも野球でも、僕はいい点を取ってやろう  
とかいいところを見せてやろうと、そんなことば  
かり考えてました。そう言うときは、かなり緊張  
して全然実力が出せませんでした。しかしこの本  
を読んで、そのような場面で、「ベストを尽くす  
だけ。ベストを尽くすただそれだけ。」と思うこ  
とでとても緊張がほぐれ、その状況を楽しめるよ  
うになりました。これからも、どんな場面でも常  
に自分のベストを尽くして、その状況を楽しみた  
いと思っています。

僕は、ここに書ききれない沢山のことをこの本  
から学びました。これからの人生、この本で学ん  
だことを大切にしながらがんばっていこうと思いま  
す。そして時々この本を読み返してみようと思いま  
す。



『もしも月がなかったら』  
ニール・F・カミンズ 著

## 『もしも月がなかったら』

2S 福谷 健太

この本を読んだきっかけは、万博に行ったことだった。その時このパピリオンを見て感動し、お土産売場でこの本を買入れた。内容はタイトルの通り、他の天文学的条件は全く同じでただ月のみが存在しない地球—ソロン（ソロな惑星）—を想定し、それを考察することによって我々の地球をあらためて見直そう、というものである。その考察は現在の地球の地質や宇宙の様子、太陽系に存在している他の惑星などを最新の科学によって分析して得られたデータを元にした、極めて精度の高いものであると実感できる。それほどまでにこの本は、ソロンの姿をリアルに描いているのである。少々、時の旅につき合っていただこう。話は四十六億年前に遡る。

まだ地球が誕生して間もない頃、地表がマグマの赤に輝いていた時代だ。原始地球に火星程度の小惑星が衝突した。後に巨大な衝突（ジャイアントインパクト）と呼ばれるその事件は、地球上の溶けた岩石や二酸化炭素を宇宙にまき散らした。固まった溶岩の一部は地球に落ち、また一部は地球の軌道に巨大な衛星を形成した。月の誕生である。今の地球はそういった歴史をたどったわけだが、必ずしも小惑星が地球に衝突する必要はなかった。ところで、月が潮汐を起こしている、というのは有名な話である。月の引力は海水を引き寄せ、海をかきまわす。同時に海底では、地球の自転に対して摩擦が起こる。この結果、地球にもたらされた恩恵は計り知れない。月は「生命のスープ」と呼ばれた原始の海に海流を作り、生物の進化を早めたばかりか、地球の自転速度を落とし、四十六億の時をかけて一日の長さを六時間から二十四時間に延ばしてみせた。これらが与えた価値を知るため、ソロンでの話をしよう。遠方の太陽の引力により、ソロンにも潮汐が発生する。ただしそれは、同時期の地球よりもはるかに小さい。生命の進化は非常に遅れる。長い時間をかけてじれったい進化を遂げた生物はしかし、陸に上がるのに多くの困難を伴う。第一に、大気中の二酸化



炭素濃度。惑星の衝突で一部の二酸化炭素を失った地球と違って、ソロンの濃密な二酸化炭素は生命の上陸を阻害する。第二に、地球の自転速度。小さな潮汐しか持たないソロンの一日は八時間程度で、その速い自転は絶えず地上に風速二十五メートル前後の強風を引き起こす。そんな環境で生きていくのは、動物はおろか植物にすら難しい。地球から比較的近い場所に、火星と呼ばれる惑星が存在する。直径は地球の半分程度で、月のような目立った衛星はない。そこにはかつて海があり、その中に微小な生命を孕んでいた。しかし現在そこに海はなく、僅かに生命の痕跡を見るだけである。その大気は未だに濃密な二酸化炭素に満たされている。ソロンがそれと同じ歴史を辿る確立は極めて高い。

この本が僕に与えてくれたのは、多くの天文学的知識だけではない。現在僕がここにこうして存在しているという、ただそれだけの奇跡を実感させてくれた。この本は特に知識を必要とせず、誰でも読めるように書かれている。機会があれば是非一度読んでみてほしい。今人類が滅亡の危機にさらしている地球がどれほど尊いものであるか、この本はきっと教えてくれることだろう。

『小説太平洋戦争』

山岡荘八 著

## 「戦後六十年について」

2S 吉野 仁

「今年は戦後六十年・・・。」

各テレビや新聞では八月十五日の「終戦の日」が近づくに連れて第二次世界大戦の報道はよく耳にするようになる。ますます戦争を体験した人々が高齢化してきている。そのために戦争があったことを風化させないためのさまざまな取り組みが行われている。そして、戦争であった真実を残そうとしている。僕が読んだこの本もそんな本の一つだと思う。

僕は山岡荘八の「小説太平洋戦争」を読んだ。この本は日本が太平洋戦争に突入するまでの経緯から戦争終決までのことが書かれている。この本の中では、その当時の日本の外交政策やさまざま

な戦いが書かれている。そして、その中には筆者自身が第三者の視点にたって冷静な態度で、しかし、克明に書かれている。その中でも特に印象に残ったのが太平洋戦争の大転換となった二つの大きな戦いである。なぜならこの二つの戦いは似通った点を持っていたからである。まずはこの二つの戦いの簡単な説明をしようと思う。

一つ目は本の題の通りにいくと「悲劇のミッドウェー海戦」である。この戦いは日本海軍がミッドウェーを攻略し、日本本土の防空の警戒線を前進させるとともに、アメリカの艦隊を誘い出して撃滅することが目的だった。しかし、結果は日本の新鋭航空母艦を失い日本海軍が再編を迫られるほどの初めての敗戦になった戦いだった。二つ目の戦いは「ガダルカナルの死闘」である。この戦いは一つ目に書いた日本海軍の敗北のミッドウェー海戦と対比される日本陸軍初めての敗戦になった戦いだった。この戦いは、アメリカ軍の反抗作戦の第一歩目の戦いだった。しかもこの戦い以後の日本軍は防戦一途の戦いをする破目に陥っている。前にこの二つの戦いは似通った点を持っていると述べた。まず一つ目は、日本の陸海軍が初めて味わった敗戦だという点である。二つ目は、連戦連勝の戦果に酔った指導部の慢心と自信過剰の点である。三つ目は、人間の体力・能力の限界に就いてであったり、指揮系統の問題であったり、更に科学の埒外に、あるかな無きかの迷信じみた、運とかツキというものに就いてである。今あげたことのすべたがこの二つの戦いの共通点である。この結果を見ると、どのような結果でもそのようになった原因となるものが必ずあるということになる。しかし、忘れてはいけないのは、必ずこうなることを予想して忠告をしている人達がいたこと。そして、結果的に見れば、原因となるものを排除していればおびたしい犠牲がなかったかもしれない。言い換えれば、まったく無意味な「犬死」ということになる。しかし、歴史の上に全く無意味な「犬死」などは存在しない。それは後世の人々が、その意味するものを探りだそうとする努力を怠り、その過去の事実から反省の資を摂取する才能を持たない場合の、まことに不遜な片付け方ではあるまいか。

最後に、人は互いに戦争では「やられたこと」は強調して言うが、自分の国或いは自分自身が「やったこと」はあまり言いたくないものである。しかし、そのままではいくら時間が過ぎようとなかなか解決しない。それよりも実際にどのようなことが行われたのかという「真実」を知らなければいけないのではないだろうか。「真実」というものは時間がたつほど風化するものである。だから僕はあえて、「リメンバー・トゥルース（真実）」と言いたい。

今年は戦後六十年。今、私たちはどのようなことを行い、何を考えなければいけないのかをいま一度見なおす機会に恵まれているのではないだろうか。

『沈黙の春』

レイチェル・カーソン 著

## 『沈黙の春』を読んで

2C 前田 久美子

私は、この本を一度読むのに挫折したことがあります。私が中学生のとき、塾でこの本の文章が問題にのっていました。わずかな文章でしたが興味をもったので読んでみました。けど難しいことが多く半分も読めませんでしたし、内容も理解できませんでした。

今、私は化学を専門とする高専生。あの時と違い、化学に対するいろいろな知識を学んできました。今年の三月頃に環境番組をテレビで見て、再びこの本を読んでみようと思いました。今度こそ読み終わらせてやると思いました。

私は化学が好きです。けど、この本を読んでいくうちに気持ちは暗くなっていきました。自分の好きな化学が進歩したせいでいろいろな被害がでていると知ったからです。気持ちが暗くなっていくのでとても一気に読むことはできませんでした。一日に二、三ページのときもありました。でもこれは中学生のときとは違って内容を理解していたからです。そして中学生のときとは違って途中であきらめませんでした。それは自分にとってとても重要なことがかかっている気がしたからです。これからも化学を学ぶ自分にとって。

この本の中には何十年前におきた化学製品での被害がたくさんかいてありました。生物、草木、水、地球にある人間以外のものすべてに影響がでているとかいてありました。私は驚きました。たった少量のある化学製品が多くに影響を与えているなんて。そしてこの量なら大丈夫とされていたものが、突然何らかの変化が起きその何万倍の量になるということも。さらに、その被害を与えたものは今の世の中でも一般的に皆使うものであることでした。化学はとても身近にあり、とても危険だと思いました。

化学を勉強している私にとってこの本はとても批判的でした。でも私はこの本を読んで更に勉強したいと思いました。それは化学は危険ではある。でもそれはあやまった使い方をすればの話。だから私はこれ以上の被害をださないようにするにはどうすればいいか知りたい。知識を増やす以外にはない。そして安心できる世の中にしていきたい。私はそう思いました。私は自然が大好きです。虫とかは苦手ですが、自然の中にいると何だか落ちつけるのです。だから私はそんな自然をこわしたくないとも思いました。

私がこの本で一番考えさせられたのは、私の軽い化学に対しての気持ちでした。化学がちょっとしたことでこんなに被害が大きいとは思っていませんでした。だから今まで真剣に勉強しようとせず、他のよりは知っていたらいいなという本当に軽い気持ちで勉強していました。本当に軽い気持ちでした。こんなにも危険と隣りあわせのものだとは思わずに。実験をやんやと楽しんでしていたときに本当に恐ろしい。一つ間違えていたら一体どうなっていたことか。

私の気持ちは変わった。あの軽い気持ちから真剣に化学と向かいあう気持ちに。これからの実験の方が危険度は増していくだろう。そのときどれだけの知識をいかせるか、これからの私次第である。そしてこれからの化学を間違った方向にいかないようにしたいと思いました。自分の心に中に大きな決意ができた。もう化学は甘くみないと。

私はとうとうこの本を全て読むことができました。だから私はこの本に勝ち、大切な心をもったのである。

『塩狩峠』  
三浦綾子 著

## 「己のごとく汝の隣を愛すべし」

### 31 河合 誠

僕がこの作品、「塩狩峠」を読んだのは、あの福知山線脱線事故が起こってからちょうど一ヶ月ほど経った日だった。

たまたま見ていたテレビ番組の中で、出演者が事故についてディスカッションしている折、あるパネラーがこんなことを言った。

「彼らに、鉄道員としての誇りはなかったのか。三浦綾子の『塩狩峠』を読むべきだ」

それがきっかけで、この本を手にとった。

物語は、永野信夫という一人の人物の生い立ちを軸に進む。少年時代、さまざまな煩惱と戦ってきた信夫は、安定した職を捨て、単身札幌へやってきた。そこには、旧制小学校来の友人、吉川の家族が住んでいた。やがて、不治の病と言われる病気を患っている吉川の妹、ふじ子を心から愛するようになり、懸命な看護の末、結婚を決意する。

ついに結納の日が来た。信夫はふじ子のいる札幌へ向かう列車に乗り込んだ。しかし、塩狩峠を越えようとして進む汽車の、客車が外れた。懸命に客車のハンドブレーキを回したが減速しきれず、ついに信夫は自身が客車の下敷きになり列車を止めた。信夫は死んでしまったのだ。

明治四十二年二月二十八日、旭川のキリスト教信者である長野政雄氏は、塩狩峠で実際に、このような形で殉職された。もちろん、長野氏は信夫の原型である。信夫がキリスト教に帰依しているか否かは別としても、彼のとった行動は、現代の人々にあまり見られない、鉄道員、いや人間の象徴であるべき姿ではないか、と思った。否応なしに、あの脱線事故のことが頭をよぎる。

信夫の鉄道員としての誇りや責任感といったものが、あの福知山線の列車に乗っていた通勤中の運転士や乗務していた車掌にかけらでもあったら、救助せずに勤務先へ向かうなどという行動には出なかったのではないか。僕は、テレビのパネラーが言っていたことがよく分かる気がした。

さて、僕はキリスト教を信仰しているわけではないが、昔キリスト教系の私立幼稚園に通ってい

た頃は、新約聖書の中からいろいろな言葉を勉強していた。その中で、一番強く心に残っている言葉がある。

「自分にしてほしいと思うとおりに 人にも同じようにしなければなりません」

園児の頃のことはあまり覚えていないが、小学生の頃から、この言葉を意識して日々の生活を送るようにしている。信夫は見事にこれを実践したのかもしれない。どこまでも謙虚で、自分の生きる価値、人間存在の価値を常に意識していた信夫は、クリスチャンとして最後まで人間の道を全うした。

表題の、「己のごとく汝の隣を愛すべし」とは、聖書の一節らしい。自分と同じように隣人を愛しなさいという意味、と作中にある。真の意味での愛とは、自分の一番大切なもの、すなわち命を人（隣人）にやってしまうことである、ともある。僕は宗教に関係なく、作中の言葉として、このような生き方をしたいと強く思った。多数の乗客の命を助けるには、一つの命の「犠牲」が必要だったのだ。命に大小などはないのである。僕は、今この犠牲になれるだろうかと自問自答してみても、自分の無力さに加え、「かわいさ」を深く自覚した。叩きのめされる思いだった。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」

一粒の麦は、枯れなければ一粒だが、枯れて土に落ちれば、その麦からまた多くの麦の果になるのだ、という意味の言葉である。言わずもがな、著者のいう一粒の麦とは信夫の命のことである。将来鉄道員を目指すものとして、これらの言葉を深く胸に刻んで歩んでいこうと、僕はこの本を読んで、心に誓った。



## 学生会図書委員による

# ブックガイド

### プログラミングのための図書館利用

3S 谷 宗一郎

図書館にはたくさんの技術書があります。私は趣味のプログラミングのため、特に情報科学の書架をよく利用するのですが、ここにある資料は非常に有用なものです。全体的にやや古いものが多いですが、新しい資料も続々と入ってきています。

授業では主にC言語でプログラミングをしますが、主に難しいというのが原因で、プログラミングなんて面白くないと感じる人もいるのではないのでしょうか？ そんなときには、もっと分かり易く軽い感じのプログラミング言語に触れ、プログラミングの面白さだけでも知れば、C言語も面白く感じられるようになるかもしれません。

そこでお薦めなのが『日本語プログラミング言語「なでしこ」公式ガイドブック』です。これはその名の通り「なでしこ」という言語の本なのですが、この言語はすべて日本語で記述でき、プログラミングの取っ付きにするには最適だと思います。

またC言語へのステップアップのためならば、『Perlの国へようこそ』が良いと思います。Perlという言語はC言語に似た表記方法を持っています。Perlである程度その表記になれておけば、C言語の学習がスムーズに進むでしょう。なお、この本は主にUNIX向けですが、Windows上での実行もほぼ問題ありません。

あと授業ではやらないと思いますが、C言語からC++へステップアップしたいならば『C++の絵本』を見てみると良いかもしれません。この本では絵本の名の通り、C++の主な機能がすべて図解で説明されているので、とても軽い気持ちで読むことが出来ます。

さて、いくつか本を挙げましたが、これらは蔵書のほんの一部です。プログラミングにちょっとでも興味があるならば、じっくりと自分に合う本を探してみるのはいかがでしょうか。

### 「感動モノ」小説の薦め

3I 河合 誠

読後にもう一度読みたくなる作品に、私はいままでいくつか出会ってきた。『四日間の奇蹟』（浅倉卓弥著）も、そういったものである。書評家、茶木則雄氏が、この新人作家が書いた作品のあとがきに、「出会えたことを感謝したくなる傑作」と記していることから、内容のよさを窺い知れる。

物語は、知的障害を持つ少女千織と、その少女の介抱役である主人公、敬輔を軸に、彼らが遭遇した数々の「奇蹟」とも呼べる体験を綴ったフィクションである。

「奇蹟」をはじめ、出会いや別れなど、人間の身に起こることは偶然でしかない、と私は思ってきた。だが、偶然というものの自体が、ある種独特の必然的な力の作用によって左右されるものなのかもしれない、と作中にある。これが真実だとすると、ではその必然を作り上げている主語は何か、と問いたくなる。が、作中には「それはたぶん、それは——」とあり、結局答えははぐらかされている。なぜ著者は答えを明確にしなかったのか。私はそこで、こういった「謎」が、作品を面白くするのではないか、と思った。他にも、こういった、答えを明確にしない箇所がいくつもある。私は今まで、答えを作中に自然と欲していたが、答えは不要なのかもしれない。あるいは、作者のこうした巧妙な「伏線術」が、ラストのシーンで、今までの出来事はすべてつながっていたのか、と思わず読者をうならせるのと同時に、感動へと結実させるのだ。

読後に心温まる、そして「生きているとは何か」と考えさせられる作品である。高専に入学し、国語の教材で扱う図書も、次第に深層まで迫るものになってきて、結末は一概に読んでいて楽しいものと言えなくなってきたが、たまにこういった「感動モノ」の小説を読むと、心から感動できると思うし、きっと心に何かを残していくと思うので、読書嫌いの人にもぜひ読んでほしい一作である。

## 意識改革、エッセイの薦め

3C 梅本 明成

私は普段ほとんど本を読みません。よってこんな人間が書評を書いていいのかとも思うのですが、今回は、若者である私が非常に興味を持った『貧困なる精神』（本多勝一著）というエッセイについて紹介させていただきます。

この本はある題材について短編的に書かれており、内容は主に俗世や人物への悪口や罵倒というものである。その罵倒する理由は、道端にしゃがむのは悪いことではないとか、イタリアのストリップが年々廃れてきているなど、実にくだらなく感じるようなものです。これだけだと著者が捻くれている様に感じますが、しかし、この本の素晴らしいところは、小さな疑問にも、確かな理由を持ってその根源を罵倒するところです。上で挙げたしゃがむことと言えば、しゃがむのが悪いのではなく、欧米の服を着てしゃがむのが悪いのであり、さらにその服が流行するのは支配される側の意識だからと書かれています。普通なら思いもつかないであろう理由だといえるでしょう。

この本は疑問を問いかけてくるのではなく、その答えを投げかけてきます。どんな小さなことにも疑問を持ち、著者が考える答えを、恥ずかしげもなく出してくれます。私たちは、どんなに親しい人に対してでも、本気で腹を割って話すことは困難です。しかしそれは、自分の中からの視点しか持てないことにもなります。ですがこのエッセイは他人の考えを見ることになり、物事を見る視点を意識的に変えてみるのに役立つと思います。

ですが、結局世の中には付き合えない人がいるように、この本が本当に嫌いな人もいるかもしれません。でも適当に嫌うのではなく、はっきりとした拒否を説明するためにも一度この本を読んで頂きたいです。著者はあとがきに、この本を役立てて使ってほしいと書いてありました。これはきっと、この本が心の成長を促すのに役立つからだと思います。では、皆さんも自分の精神を考えてこの本を読んでみてください。

## 乱暴なランボー

5S 林 公造

突然ですが、皆さんは「ランボー」という映画作品を知っていますか？この映画は『一人だけの軍隊』（デヴィッド・マレル著）という、一人の男と警官隊のゲリラ戦を描いた、戦争に対するメッセージ性の強いとても印象的な作品を映画化したものなのです。しかしこの作品は原作と映画を比べてみると明らかに違った印象を受けるでしょう。映画自体とても面白い作品なのですが、主演兼脚本のスタローンの所為か、ただのアクション映画というイメージが強くなってしまったのです。私は映画を見た後に原作を読んだのですが、映画以上に登場人物の心の葛藤、ゲリラ戦や拷問の残酷さが痛々しいほどに鮮明に伝わってきて、その奥の深さに激しく興奮し感動しました。

これはランボーに限ったことではなく映画化される多くの作品に言えることです。映画化するためには物語を約2時間程度の枠に収めなければならなりません。500ページを超える長編小説になると、全てをその間に表現することは不可能です。そのため映像にした時に映えるシーンを選んだり、物語の進みスピードを無理やり早くしたりして簡略化されるのです。またその演出を行う脚本家や監督、出演している俳優の影響で作品の雰囲気や全く変わってしまうこともあるのです。これは映画に限らずドラマ化された作品等にも言えることでしょう。

小説の魅力は何と言っても、自分のペースでその作品の全てを味わえることです。じっくりと情景を思い浮かべながら読むのもいいし、面白そうなところだけじっくりと読むのもいいと思います。自分の好きなように読んで、その自由さを感じることで、本を読むことが楽しくなると思います。特に本を読むことがあまり好きでない人には自分の好きな映画やドラマの原作本を探してみることをお勧めします。またベストセラーになった作品を読んで流行を先取りするのもいいと思います。本を読むことをあまり難しく考えないで、もっと自由に楽しんでみてはどうでしょうか。

## 編集後記

今年度から、「図書館だより」は年一回だけの発行となりました。残念ながら、そういうことなんです。ところで、読書感想文コンクールでがんばったみなさん、ありがとうございました。がんばれなかったみなさんも、がんばれるときにがんばりましょう。「書きたくなる気分」ってものは、あると思います。それは、ある一冊に出会ったときかもしれません。ふらりと図書館に立ち寄ってみてください。何か良いことあるかも、ですよ。

(情報メディア教育センター)

奈良工業高等専門学校図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp/>